



産業別組合は可能か？

11月27日(金)、関西生コン学働館にて開催された『日本で産業別組合は可能か?』と題した学習会に参加しました。

司会の細野直也さん(大阪労働学校専務理事)から紹介があり、山元一英(全港湾大阪支部特別執行委員)のあいさつで学習会がスタートしました。

伊藤彰信さん(元全港湾中央執行委員長)が講師で、『アメリカでの港湾産別労働組合の闘い』について、講演されました。「自分の会社と闘うことは個別闘争で、同業他社に対して闘う事が産別闘争なんだ」と話されました。また、ILWU(国際港湾倉庫労働組合)から教わったことは、

- ①日米港湾労働者は船会社という共通の敵と闘っている
- ②労働協約の適用範囲が組合員(管轄権)であること
- ③人の痛みは、自分の痛みと感ずること
- ④指導部の強力な権限と徹底した民主主義、大衆路線を継承して闘うこと
- ⑤団結・連帯の意識=家族ぐるみ、他組織との共同闘争、国際連帯の重視、

など、これらを踏まえての産業別労働組合で労働条件引き下げ競争の防止など、その役割は欠くことができませんと訴えました。

その後、パネルディスカッショ

ンでは、山元さんと伊藤さん、南守さん(福祉・介護・医療労働者組合執行委員長)、武洋一さん(連帯労組関西地区生コン支部書記長)のメンバーでそれぞれの立場で労働組合について語って頂きました。

特に武さんからは産別闘争について、弾圧を受けながらも熱い思いを話されていました。

南さんからは介護産業について語られました。その中で介護産業の特徴として、介護保険制度の財源の50%は被保険者が納め、財源



の残りの50%は税金によって支えられています。介護市場は今後の急成長が確実視されているが、介護職の賃金は63職種のなかで圧倒的に最下位です。介護報酬の処遇改善加算と、しれつな人材獲得競争によって、賃金は徐々に上昇している傾向ですが、重労働、低賃金の業種に人材が集まるはずがありません。劣悪な労働条件、環境を整えていくために他の労組との連携を図り、共通目標を達成しなければいけないと訴えました。

港湾はコンテナ化との闘い

体制的合理化(港湾コンテナ化)の闘いとして、港湾労働者の雇用

の責任および就労と生活保障の責任は、港湾を整備拡充し、管理運営権を持っている国や地方自治体、港を利用している船社や荷主、それに港湾運送事業者の三者が負うべきであるが、制度闘争が先行しているなか、産別賃金闘争も、重要な取り組みとして展開しています。

生コンからの発言として

集団的労使交渉を構築するために他の労組も含めて同盟等もいれた中での統一要求、統一交渉、統一行動などを構築し、産別闘争に持っていく。ここで働いても休みは一緒、賃金も分かりやすく体系を簡素化した。中小企業が生き残れるようにしていくことも必要である。

登録派遣雇用の賃金も25000円から19000円に落とされている。しかも、建交労の賃金底上げの触れ込みでの春闘も上限を押さえた上での下限の底上げである。実質的に賃金の上まらない労働者が多く、問題は山積しています。

それぞれの立場からの発言や考え方などがあり、産別とは何ぞや?との疑問も私たちに投げ掛けられていると思います。私たちが結集している全港湾は産業別労働組合です。今一度、産業別労働組合とは何なのか、また、産業別労働組合として、どう闘って行くのかを組合員で議論、討論しても良いのではないのでしょうか。

(執行部 岡 英一)

岩国反戦集会に参加して

11月28日、29日、山口県岩国市で、新型コロナウイルス感染拡大の中、開催が危ぶまれた状況でしたが地元のご尽力で開催された「岩国・労働者反戦交流集会」及び「岩国国際連帯集会」へ、支部から陣内副委員長と2名で参加しました。

岩国駅に到着して感じたのは米軍関係者と思われる外国人の多さに目を奪われました。「基地の街・岩国」を到着早々実感させられました。

その後15時からのフィールドワークは20名が参加しました。岩国基地が見渡せる場所で戸村良人さん（写真家）から多くの写真と日々の活動が報告され、初めて参加した人は驚愕していました。



戸村さんは1年中ほぼ毎日岩国基地を撮影されており、軍用機の数や訓練の様子などを、日々監視をしています。マスコミ関係者も基地の報道がある際は、戸村さんから画像の提供を受けるほどです。

基地内ではタッチ・アンド・ゴーと呼ばれている着艦模擬飛行訓練が夜間に行われ、夜間訓練を行う時の騒音は最も激しく、その訓練の特殊性から他に類をみない激しい爆音を発生させています。

基地周辺住民はもとより近隣町村へも家族団らん、受験勉強、睡眠、休養などにおいて多大な騒音障害を与えるにも係わらず、日本

政府はさせないと発言しましたが、米軍は平然と訓練を実行しています。危険度が高い事、戦闘機の爆音が長時間続く事など岩国市民を苦しめる訓練が平然と行われることは許せません。

◇だまされた愛宕山開発

基地を見たあと、愛宕山開発地区に行きました。基地を沖合いに移設するために埋め立て用の土砂採取がおこなわれた愛宕山は、市民のための21世紀型多機能都市として再開発される計画でしたが、赤字を理由に計画は廃止され、将校用の米軍住宅262戸が建ち並ぶ米軍住宅になりました。岩国でも基地に係る環境問題や事件事故などが起きています。岩国市民のためにと税金でつくられた宅地も道路もみな米軍が接収したのです。市長・市議会も市民をだまして米軍ファーストの追認機関となり、基地周辺では危険度が高い訓練が行われ、戦闘機の爆音が長時間続くなど、岩国市民を苦しめる訓練が平然と行われることは許せません。



◇各地労働者からの訴え

17時から岩国市民文化会館で「岩国・労働者反戦集会」が行われました。参加者は密を避け30名が参加しました。

集会開催あいさつとして全日建近畿地方本部・垣沼陽輔さんから、

基調提起を介護福祉労働組合執行委員長・南守さんをはじめ、各労組代表5名からも活動報告、問題提起がありました。支部からは陣内副委員長が「琉球弧（南西諸島）の軍事強化について」発言しました。

岩国行動2日目は、同ホールにて「岩国国際連帯集会」が行われました。参加人数は前日を遥かに超える80名以上が参加しました。

集会は基調報告、海外からの連帯メッセージビデオ、関西生コン弾圧との闘いの報告などの活動報告と共闘の呼びかけなどがありました。その後、市役所横の公園で野外集会を行い、岩国基地までのデモ行進に出発しました。



基地正門前では英語でシュプレヒコールを行いました。「No base, for peace!」（平和のために基地はいらない）「US troops, out now!」（米軍は今すぐ撤退）「Kick out, US base!」（米軍基地を追い出そう）と約1時間半かけてのデモ行進を経て、最終地点の公園で「これからも国際連帯行動で岩国と繋ごう!」と拳をあげました。

私は執行委員になるまで平和問題、人権問題にあまり興味がなく避けて通ってきました。今回の岩国行動を通じ、現地最前線で闘っている方がたの話しを直接お聞きしたことで、「基地問題、人権問題は深いところで繋がっていて、我われ組合員が避けて通る事ができない問題である」と実感しました。

（執行部 佐久原智彦）